

第5章 総括

本書では、伯耆国分寺古墳から出土した副葬品群について詳細な資料化をおこなうことを主眼とした。また、それにあわせて1924年に報告された『因伯二國における古墳の調査』〔梅原1924〕の基礎資料となった梅原考古資料（公益財団法人東洋文庫所蔵）についてその内容を整理・紹介した。さらにこれらの成果をふまえて、出土した各種の副葬品ならびに古墳そのものを対象とした研究を実施し、伯耆国分寺古墳の位置づけを明らかにすることをめざした。ここでは、得られた成果を総括することを通して、伯耆国分寺古墳の築造年代を明らかにし、古墳の築造背景とその歴史的意義について考察を試みることにしたい。

1 伯耆国分寺古墳の築造時期

伯耆国分寺古墳からはさまざまな副葬品が出土している。銅鏡をはじめ、鉄鏃や刀剣類といった武器類、農工具が出土しており、それらの製作年代あるいは副葬年代を把握することによって、古墳の築造時期を絞り込むことが可能となる。そこで、各種の副葬品の年代的位置を確認することを通して、伯耆国分寺古墳の築造時期についての所見をまとめることにしたい。

銅鏡 銅鏡は漢鏡2面と三角縁神獸鏡1面からなる（第4章1岩本論考）。漢鏡は八鳳鏡と同向式二神二獸鏡であり、前者が2世紀前半から中葉ごろ、後者が2世紀後半の製作とみられる。三角縁神獸鏡は舶載鏡の5段階からなる製作段階のうち第2段階に相当する資料である。その製作年代は3世紀中葉と想定される。出土鏡のなかでももっとも新相を示すのは三角縁神獸鏡であり、製作後スムーズに副葬された場合には、前期古墳を5期に区分する編年案〔岩本2018a、以下では中四研編年とする〕では、I期に比定できる内容である。古墳出土鏡としては最古相の組成をもつと評価できる。ただし、銅鏡は古墳の副葬品のなかでも、とりわけ長期保有される傾向が顕著な器物である〔森下1998〕。鏡の年代は、古墳の築造時期の上限を示す材料にとどまる場合が少なくないことを十分に承知しておく必要がある。

武器 鉄製武器として鉄鏃、ヤリ、短刀の存在を確認できる（第4章2池淵論考）。このうち、鉄鏃は箱式棺から出土したとされる。

まず、鉄鏃は鑿頭式鉄鏃であり、法量と平面形態から細分が可能である。同一系列をなすものには、神原神社古墳例や紫金山古墳例があり、伯耆国分寺古墳例は神原神社古墳例より形態が弛緩しており、後出的といえるようである。その年代は、中四研編年のⅡ期～Ⅳ期と判断される。

つぎにヤリは2点が確認されており、把縁形態は糸巻底辺型と直線型が1点ずつ確認される。糸巻底辺型は山形部分の形態が直線的ではなく、円弧をなす型式に細分できるものである。いずれも中四研編年ではⅡ期以降の古墳から副葬が一般化するとみられる。

短刀は法量から細分が可能であり、伯耆国分寺古墳例は大刀のミニチュアとして把握される型式であるという。前期古墳のなかでは前半に比定される黒塚古墳に例外的に副葬されているが、中四研編年のⅢ・Ⅳ期に集中して出土例を確認できる。この点を考慮すると、伯耆国分寺古墳例もⅢ・Ⅳ期のなかで把握すべき資料であると考えられる。

農工具 伯耆国分寺古墳の副葬品のなかでも、品目と量においてもっとも充実しているのは鉄製農工具である。複数の品目がまとまって出土しており、ここでは年代の手がかりとしうる方形鍬鋤先、

鎌、短冊形鉄斧、鉈を検討の俎上におけることにしたい（第4章3 磯貝論考）。

方形鋏鋤先は、中四研編年Ⅳ期以降に副葬が一般化し、中期前半にかけて量的な副葬が顕在化する品目である。問題となるのが、前期前半でも古相を示すとみられる浦間茶臼山古墳や神原神社古墳でその存在が確認されている点であろう。とはいえ、中四研編年のⅠ～Ⅲ期にあたる古墳で出土する例はきわめて少なく、前期後半（中四研編年Ⅳ期）以降に盛行する品目とみて差し支えないであろう。

鎌については、伯耆国分寺古墳では背が外反する直刃鎌が目立つ点を指摘でき、同様の特徴をもつ例は中四研編年Ⅳ期以降に顕著となる傾向がある。ただし、方形鋏鋤先と同様に、前期前半でも古相の安満宮山古墳などにも類例があり、前期前半段階に少数ながら副葬されたとみられる。

短冊形鉄斧は、細かな時期の絞り込みは難しいが、古墳時代前期の幅で副葬時期を考えうる品目である。わずかに中期初頭に残存する可能性があるが、主体とはならない。

鉄鉈は伯耆国分寺古墳の農工具をもっとも特徴づける品目であり、柄の有機質がきわめて良好に残存し、その構造をくわしく把握することのできる数的にもまとまった資料群である。検討の結果、柄については把縁の細部形状から構造的に3類に区分しうることが明らかとなった。そのなかでも2b類とした構造をもつものは、数は限られるが紫金山古墳や寺戸大塚古墳前方部石櫛に類例があり、柄と鉄の本体の固定に布巻きを用いる点でも高い共通性を示す。類例を出土した古墳が中四研編年Ⅳ期に比定できる点から、伯耆国分寺古墳も近い時期に築造された可能性が高いと考える。

伯耆国分寺古墳の築造時期 以上の出土遺物の年代から伯耆国分寺古墳の築造時期を絞り込むならば、複数の遺物で年代観が共通する中四研編年Ⅳ期とする理解をもっとも有力視できる（第49図）。また、その場合の時期表現としては、古墳時代前期後半古相をもっともふさわしい。暦年代については慎重な議論を要するところではあるが、4世紀第1四半期を上限としつつ第2四半期に中心があるものと考えておきたい〔岩本2018b〕。

なお、各種の副葬品から導き出された年代観は、木棺埋葬の特徴から想定される中四研編年Ⅳ・Ⅴ期ごろとの検討結果（第4章6 高田論考）とも矛盾しない。また、箱式棺については、鉄鋸の年代観に頼るしかないが、木棺埋葬とほぼ同時期のものとみてよいだろう。

中四研編年 〔岩本2018〕	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	Ⅵ期
和田編年〔和田1987〕	1期	2期			3期	4期
集成編年〔広瀬1991〕	1期	2期		3期		4期
銅鏡	八鳳鏡（2A式）	桜井茶臼山・象鼻山1号		へぼソ塚	伯耆国分寺・国分尼塚1号	
	同向式二神二獣鏡			東之宮	伯耆国分寺	
	三角縁神獸鏡 （表現⑤・F2群）	安満宮山・権現山51号	黒塚・椿井大塚山			石切神社周辺
武器	鉄 鎌 （鑿頭式B1類Ⅳ類）	神原神社		伯耆国分寺・紫金山		
	ヤリ （糸巻底辺凹弧・直線）	西求女塚・椿井大塚山		メスリ山	伯耆国分寺・大迫山1号・寺戸大塚（前）	新沢500号 和泉黄金塚
	短 刀（A類）	黒塚		真名井	伯耆国分寺・紫金山・寺戸大塚（前）	
農工具	方形鋏鋤先	浦間茶臼山・神原神社	元稲荷	伯耆国分寺・紫金山・会津大塚山		新沢500号 金蔵山（中央）
	直刃鎌（背外反）	安満宮山	弁天山C1号		伯耆国分寺・免ヶ平・寺戸大塚（前）	新沢500号 金蔵山（中央）
	短冊形鉄斧	安満宮山	西求女塚・椿井大塚山	真名井	伯耆国分寺・大丸山・会津大塚山	中道銚子塚 松林山
	鉄鉈（2b類）			伯耆国分寺・紫金山・寺戸大塚（前）		

〔凡例〕古墳名のゴシック体表記は、時期比定の確度が高いと考えられるもの。斜体にした古墳名は、時期比定にあたって検討を要する事例であることをあらわす。各品目（型式）の主要な副葬時期をグレーの実線で表記する。破線による表記はその存在が安定的ではないこと、濃度は存在の度合いをあらわす。銅鏡のうち、漢鏡は製作年代が古墳時代以前に遡るため、存続期間の表記をおこなわず、類例の出土古墳の位置づけのみを示す。

第49図 副葬品からみた伯耆国分寺古墳の年代的位置

2 伯耆国分寺古墳の築造背景と歴史的意義

伯耆国分寺古墳の築造年代は古墳時代前期後半古相（中四研編年Ⅳ期）に比定できることが明らかとなった。それでは、いかなる背景のもとに伯耆国分寺古墳が築造されたのか。この点について、副葬品の入手経緯や埋葬施設にみる特徴などをもとに検討を加えることにする。それをふまえて、古墳が築造された歴史的意義についても展望を述べることにしたい。

（1）築造の背景

古墳の築造背景を考察するにあたって、副葬品からうかがわれる社会関係とその入手実態から分析するとともに、あわせて埋葬施設の特徴から古墳築造にみえる社会関係について検討してみよう。

副葬品の入手実態 「同範鏡論」によれば三角縁神獸鏡の入手は倭王権との関係を示すものと理解し、「伝世鏡論」では漢鏡の入手が倭王権を介さず地域社会によってなされた可能性を考える必要がある〔小林1955〕。しかし、検討したように（第4章1岩本論考）、伯耆国分寺古墳に副葬された漢鏡と三角縁神獸鏡は一括して倭王権から入手された可能性が高く、伯耆国分寺古墳の造営主体と倭王権との強いつながりを想定することができる。

これに関連して、赤色顔料が朱であれば、その産地が日本列島と中国大陸のいずれに求めうるかが、きわめて重要な見方をもたらすと考えて、理化学的分析を実施した。分析の結果、伯耆国分寺古墳の赤色顔料には朱が含まれており（第4章4上山論考）、その硫黄同位体比は日本列島産を示す値であることから近畿中央部を介してもたらされた可能性を想定しうるようになった（第4章5南論考）。

武器については、鑿頭式鉄鏃が山陰に分布する傾向を指摘でき、地域生産の可能性を考慮する必要があるが（第4章2池淵論考）、その副葬が有力な首長墓に限定される状況もいっぼうでみとめられる。ヤリや短刀の類例が列島の広域におよぶ古墳にみられる点にも留意しておきたい。

また農工具は、豊富な品目を備えた組成や個別品目の形式的な特徴から、近畿中央部とのかかわりを積極的に想定できる（第4章3磯貝論考）。

以上のように、伯耆国分寺古墳から出土した副葬品には、倭王権あるいは近畿中央部との社会関係のなかで入手しうるような内容を備えた例が目立つ。また、各種の副葬品の数量や組み合わせにおいて山陰のなかでも卓越した内容をもつ点も、上記の想定と矛盾しない。

埋葬施設にみる特質 上記の副葬品の内容にたいして、古墳の遺構にみる特徴からは、伯耆国分寺古墳について別の理解が可能となる。これまでは伯耆国分寺古墳の中心埋葬は粘土槨であるとされ、その点も近畿中央部との関係によるものと理解されてきた。しかし、このたび記録類の精査と類例との比較検討をあらためておこなったところ、鳥取県東部地域の前期古墳との共通点を指摘しうるようになった（第4章6高田論考）。これは、伯耆国分寺古墳の墳丘に埴輪や葺石といった外表施設がともなわない点ともきわめて整合的であり、葬送儀礼を含めた古墳築造にかかわる諸行為に地域性が維持されていた可能性を強く示すものとして大いに重視すべきと考える。

築造の背景 以上の議論を総括すると、副葬品の入手にみる近畿中央部を中心とした集団関係とともに、古墳築造にみる在地的な主体性を基盤とした集団関係の双方が重層し、有機的に結びついた社会関係が存在しえた点をうかがうことができる。このような、いっけんすれば相反するような二つの側面が同時に維持された背景には、古墳の築造に際して地域社会の諸集団によるさまざまな自律的な選択が許容された可能性を想定しうるのであろう。伯耆国分寺古墳の築造には、そうした地域社会をとりまく状況がきわめて鮮明に映し出されているのである。

(2) 築造の意義

伯耆国分寺古墳が築造された歴史的意義を考究するうえでは、その築造時期の社会動向を日本列島はもとより東アジアにおよぶ視点から把握することがきわめて重要である。

前節で導き出したとおり、伯耆国分寺古墳の築造年代は古墳時代前期後半古相（中四研編年Ⅳ期）に比定でき、列島広域におよぶ視点では共通性の高い埴輪様式とともに前方後円墳が広く展開する時期（中四研編年Ⅴ期）の前段階に相当する。

相対年代における前期後半古相（中四研編年Ⅳ期）は、標識的には「仿製」三角縁神獸鏡の古段階に相当する例の主要な副葬時期にあたる〔岩本 2018a〕。同時期の代表的な古墳には、奈良県新山古墳や大阪府紫金山古墳などがある。新山古墳からはいわゆる晋式帯金具が出土しており、この時期には西晋王朝を介して入手した器物が副葬された可能性のあることがわかる。これにたいし、紫金山古墳では筒形銅器や堅矧板革綴短甲が出土しており、韓半島南部との交渉の関連性を想定できる。したがって、伯耆国分寺古墳の築造に至るまでのプロセスも、3世紀を中心とした魏晋王朝との交渉から4世紀以降の韓半島南部交渉へとシフトする社会情勢の変化のなかで把握されるべきと考えられる。すなわち、伯耆国分寺古墳が築造された4世紀前半は、東アジア情勢の影響による対外交渉の変化からきわめて多様かつ複雑な社会関係にあったとみられ、それゆえに倭王権を中心とした広域的な関係性の比重を高めつつも、いっぽうで在地を主体とした地域的な関係もなお強く維持されたのであろう。

そして、いま一つ注目すべきは、伯耆国分寺古墳が築造された時期に鳥取県を中心とする山陰東部では前方後円墳の築造が始動するとみられる点である。それぞれの古墳の築造時期についてはなお検討を要するが、本高14号墳や宮内狐塚古墳は土器から前期後半古相（中四研編年Ⅳ期）の築造である可能性がきわめて高く、浅井11号墳も墳丘形態や埋葬施設の構造から同時期となる可能性がある。このことは、山陰東部における前方後円墳の築造開始年代をこれまでの前期後半新相（中四研編年Ⅴ期）とみる理解から引き上げることに大きく作用し、伯耆国分寺古墳の墳丘形態を前方後円墳か前方後方墳のいずれとみるべきかという議論にも一定の示唆を与えるものと考えられる。

以上に述べたように、伯耆国分寺古墳の築造にみる歴史的意義は山陰東部における前方後円墳の出現と一連の動向として理解でき、その背景には脈動する東アジア情勢とそれにとまなう対外交渉の変化を反映した倭王権と地域社会をめぐる複雑な社会関係の形成が垣間みえる。そのうえで、それ以前にあたる古墳時代前期前半段階とは異なって、倭王権を中心とした社会からより強い働きかけが生じたからこそ、山陰東部において連動的に複数の前方後円墳の導入が促されたとみるのが資料の実態に即した理解であろう。伯耆国分寺古墳の副葬品にはそうした動向が顕著にうかがわれるのである。

今後、本書の成果を基礎として、伯耆国分寺古墳をめぐる議論が活発になされ、さらには出土品が地域を語る文化財として保全・活用されることを期待する。

引用文献

- 岩本 崇 2018a 「副葬品と埴輪による前期古墳広域編年」『前期古墳編年を再考する』六一書房 pp.137-148
岩本 崇 2018b 「古墳時代前期暦年代の試論」『前期古墳編年を再考する』六一書房 pp.301-310
梅原末治 1924 「因伯二國における古墳の調査」『鳥取縣史蹟勝地調査報告』第2冊 鳥取縣
小林行雄 1955 「古墳の発生の歴史的意義」『史林』第38巻第1号 史学研究会 pp.1-20
広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社 pp.24-26
森下章司 1998 「鏡の伝世」『史林』第81巻第4号 史学研究会 pp.1-34
和田晴吾 1987 「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第2号 考古学研究会 pp.44-55